



知られざる女子留学生

曾根 雅俊

生田澄江
『瓜生繁子—もう一人の女子留学生』
文藝春秋企画出版部、
2009(請求記号●J115-424)

皆さんは、津田梅子、山川捨松、瓜生繁子という名前を聞いたことがありませんか。この3人に吉益亮子、上田梯子を加えた5人が1871(明治4)年に欧米視察の岩倉使節団と共に渡米した日本初の女子留学生なのです。この中で後の2人は、学業半ばで帰国し、歴史の中から消えてしまいましたが、津田梅子は、TACの一員である津田塾大学の前身である女子英学塾を創立し、女子教育の世界で活躍しました。また、山川捨松は、『坂の上の雲』にも登場する大山巖と結婚し大山捨松として鹿鳴館の舞踏会などに登場します。

普通留学するといえば、当然何かを学ぶためにするはずですが、この5人の留学生は、何を勉強するために留学したのかが実はよくわかりません。年齢も8歳から15歳と若いと言うよりもむしろ幼いといったほうがよい年齢です。しかもこの5人を派遣した母体は、なんと「北海道開拓使」というのですから驚きです。開拓使次官であった黒田清隆がアメリカ視察旅行で接したアメリカ女性の教養の高さに驚き、家庭で子女を育てる

女性に対する教育が重要なことを痛感し、女子留学生をアメリカに送ることになったということが背景にあるのです。

さてなぜ瓜生繁子(旧姓永井)についての伝記を取り上げることにしたかと言うと、彼女は1881年に帰国するまでの10年にわたるアメリカ留学中に音楽を学び、帰国後は音楽取調掛で伊沢修二やメーソンを手助けし、東京音楽学校になってからも教師として活動しているからです。また私個人としては、海軍大将瓜生外吉夫人であったことにも興味を惹かれました。瓜生外吉という人は、日露戦争での活躍が『坂の上の雲』にも出てきますが、1877年アナポリス海軍兵学校に留学しました。そして留学先のアメリカで永井繁子と知り合い、帰国後結婚することになります。繁子21歳の時です。

繁子は子どもを育てながら、東京音楽学校で後進の指導にあたり、演奏もするという八面六臂の活躍をしました。東京音楽学校の教師としては、学校の方向性が教員養成から、芸術家養成へ変わって

いったこと、音楽の傾向がドイツ音楽に向かつていくなどのわけで、残念ながら10年ほどで辞めることになりました。しかしその後も女子高等師範学校の教師を務め、そして1902年教師を辞め41歳で家庭に入るようになります。

わずか10歳で渡米した繁子は、帰国したときにはほとんど日本語を忘れていたとのこと。繁子の1年後に帰国した津田梅子、山川捨松の二人も同様だったのでしよう。言葉の問題もあり山川捨松は大山巖と結婚し家庭に入ってしまった、津田梅子も大変苦労したようです。本の中に出てきますが、『言葉はなくとも通じる「音楽」という武器が、繁子を幸運児にしたといえよう』とあるように、留学先で音楽を学ぶという選択をした繁子の幸運、そして留学先で瓜生外吉と知り合ったことがまさに運命といえるでしょう。音楽教育の場から身を引いて後には、日米関係の悪化を改善するために夫と共に渡米したりと、色々な活動をされています。最初の女子留学生の生涯に、一度触れてみてはいかがでしょうか。

●そね まさとし 私の周りにも留学経験者が大勢いらっしゃいます。歌、ピアノ、語学などなど、もっともっと活躍していただきたいと思ひます。